

# 吉井源太と明治

《29》

## 雪深い坂を越えて

吉井源太は明治二十（一八八七）年早春に鳥取県へ巡回指導の旅に出た。二カ月半におよぶもので、滞在中は、ほぼ連日各地域を回って、紙の製法に関するいろいろなことを教えた。鳥取までの道のりだけを見て、苦労がしのばれる。

源太は同年三月二日の午前十時三十分、浦戸を出港した。翌三日の午前四時に神戸湊に入る。午前六時半に神戸から人力車に乗り、陸路を出発する。兵庫―明石間に鉄道が開通するのは翌年のことだ。

このあとさらに西へ進んで姫路へ着く。ここから北へ向かい、中国山地に入っていく。因幡街道という、鳥取への街道をたどることになる。

現代の鉄道路線では、ほぼ姫新線で佐用へ行き、そこから智頭急行をたどるという道筋になる。姫路を過ぎてすぐにある追分坂というところでは、いったんふもとで休み、人力車を降りて、空の車とともに歩いて越えた。その道でも路傍に見える木の名前を車夫に尋ねたりしている。坂を越えたところでまた一泊。

四日は午前六時二十分に立。相坂などいくつかの坂を越え、因幡街道の宿場町であった平福に入る。ここで昼飯をすませる。近く

には鎌力坂という坂がある。ここからさらに北へ進み、柘や雁皮が生えているというところも書きとめていく。現在は宮本武蔵の



明治20年の日記に、絵入りで記された鳥取紀行のくだり（いの町紙の博物館蔵）

誕生の地として有名になっている所。源太はここで、新道を作っているところだという話を車夫から聞いたと書いている。これを越えると鳥取県との境になる坂根に着く。ここで一泊する。

五日は午前六時に出発、坂根を過ぎて鳥取県にはいる。志戸坂、駒帰山などが続き、難所であるうえ、この時、駒帰山は大雪で人力車が通行止めになっていたらしい。日記には、「駕籠にて越す。三人がかり」と書いてある。

日記からわかる様子はこうだ。このあたりは春になって少し温かくなっていたが、源太が来る少し前から冷え込み、この日は雪が四尺（約百二十センチ）積もっていた。

寒さは非常に厳しく、百五十センチのつらが下がり、子どもはその間を行ったりきたりしている。人がいうには、道は新道開削のためのは、道は新道開削のためは取りつぶされている。旅人が大いに困っているという状況だった。

この駒帰山を九時に越えた。このあと智頭で一休みする。そしてまた北へ進んで、現在、鳥取の流し灘の里となっている用ヶ瀬に入る。源太は、道中で三椏が生えていることや、牛車でこの皮を運んでいるのを見て、日記に書きとめている。この日の午後四時に鳥取市内に入った。高知からまる四日かかっている。

（京大大学院研修員、京都府在住）